

令和3年 ぼちぼちの会研修会報告

令和3年12月4日（金）13時半～

本年度の研修会を臨床心理士の武部 愛子先生を講師にお招きして下記の要綱で実施しました。昨年度は新型コロナ対策のため中止しましたが、本年度は幸いにも感染状況が落ち着いており開催をすることができました。講演の前半はテーマに沿ったお話、後半は、講師の先生に具体的な質問などを行い研修を深めることができました。武部先生のお話を聞くのは今回で10回目。他の保護者の会の学習会を含めるとかなりの数になります。しかし、お話を聞くたびにその内容が広がっていくのを感じます。普段から直接生徒や保護者と接して指導をなされたり、各地での事例を積み重ねてこられている結果だと思えます。質疑応答の時間など先生の具体的な指導を仰ぎながら、単なる知識としてだけでなく具体的な対応法など多くのことを学ばせていただきました。

～思春期・不登校・特別支援教育～

◎日時：令和3年12月4日（土）13時半から15時半

◎場所：福岡市立若久公民館 講堂（福岡市南区若久1丁目11-20）

◎講師：武部 愛子 先生（臨床心理士）

◎内容 ～思春期・不登校・特別支援教育～

生徒の進路情報・発達段階と親の関わり・障がいの理解など



- ・臨床心理士 ・福岡こども短期大学 子ども教育学科 教授
- ・福岡市教育委員 ・福岡市スクールカウンセラ運営委員
- ・太宰府市スクー ルカウンセラー
- ・福岡県スクー ルアドバイザー・発達障がい児等教育継続支援事業に係る巡回相談 相談委員

・学童保育協会 副理事長 ・福岡県臨床心理士会 理事博多学園高校スクー ルカウンセラー

講演 発達の課題を受け入れる親の対応

・不登校は誰でもなるとはいつでもその傾向の強い子どもはいる。発達の課題を持つ子どもたちはそれにあたるだろう。もともと持っているもの以外にも、社交性、楽観性、見通しの明るさ、思考力、行動性など集団の中で獲得するものは多い。

・最近の子どもたちは課題があっても相談せず、ためる傾向があり、それがたまって恨みになって突然放出をする。最近では喧嘩もしないので「何とかなる」「何とかしようとする力が低下している。前向きに解決する力のもとになるものは自己理解である。」適応に苦手な子どもほど自分を知らないといけない。集団が苦手な自分を認めること決して悪いことではない。集団に所属することが苦手だと知ること。それがわからないと、相手は自分と違うことが理解できないと折り合いのつけ方もわからない。

・「あなたの考えは面白いね。でも理解してもらえないかも」超ユニークな人は何を言っ

でも理解してもらえないかも知れない。常に集団は得意ではないし周りとの認識の違いがあることを認識する。自分は正しいことを言っているのに認めてもらえないことを理解する。

・「なぜ言わなかったの」「なぜ相談しなかったの」周囲が勝手に決めて判断しているが、フランクに相談できる状態がないことが問題で、いつの間にか「自分が悪いのでは」と思ってしまう。

・大人は、子どもが聞かないとわからないこと、本人と丁寧に話すことが大切で、外から与える目標が本人の目標になってないことが多い。提案しないことの大切さ。

・できそうかな。「こうしたら」の提案は子どもが勝手に納得して自分の目標と間違う。本人が自分で考えたことが言える環境。

・自己理解（何が苦手で何が得意かを知る）

・今聞いてすぐには答えられないので、提案して2・3日は待つ。すぐ出る答えは親の気に入るものをこたえるか否定になる。咀嚼して自分の問題として考える時間を与える。待つ時間を持つ。

・すぐには反応しない。種をまいておけばいいともうこと。いったらやらなければならないと思っているから言わない。

・小学校5・6年になったら中学校が見えてくる。「中学校になったら行く」など、根拠のない提案をするが「えーなんで」と受け入れ、本人なりの根拠に「なるほどね」と否定しない。

・集団適応しにくいIQが100ぐらいの子ども（約7割の子ども）がちょうどで、両方にはなれば離れるだけ生きにくくなる。

・考え方が違う、思いが違うから。発達のユニークさが原因。

・発達のずれは世界観の違いであって周囲が理解してあげられないだけであってもっと信頼してもいいのではないか。

むづかしい環境にあればあるほど発達の課題のある子どもは発達がむづかしくなる。

質疑

○どこまで手を出してやればいいのかわからない。

手助けの答えを周囲から先に出さない。どこまでがわからないのか、どこまでやれるのかを探る。一緒にやる。何がわかっていて何がわからないのかを一緒にやって探る。一緒に活動して自分からやるのを待つ。

○0か100か判断基準が極端。ほめ方について

ほめることはむづかしい。本人の理想（プライド）が高い。そこを褒められても本人が納得しない。大事なのはできないことを褒める。苦手なことなのによくやっているね。苦手を褒める。得意なことをやるのは当たり前。子どもに対するパフォーマンスも大切。学校はあくまでも生きる力を手に入れる道具。本人が褒められる予感のところを褒めるのは当然だが、本人が「へーっ」「そこ」と褒められていないと思うところを褒めると立ち止ま

って考える。

何かを伝えようと思ったり、褒められるとき本人の思っていない声掛けをすると、本人も立ち止まっていったん持ち帰るぐらいがちょうどいい。即決しない。自分で考える。

ほめるのはむつかしいので「認める」を大切にする。まずは受け止めよう。

○面倒くさいと言ってやらない。

基本子どもに面倒はない。そういう理由はある。（・やりたくない・わからない・別のことがしたい・量が多い・自信がないなど）理解してもらいたい。

○病院の先生の指示にどこまで従うか

病院の先生は集団の中の子どもは見ない。子としての本人しか見ないので「行かなくていい」という。本人は一人のほうがいいというのでそれを尊重する。しかし Dr は学校のシステムを知らないので、実態と合わないことが多い。どんな配慮が可能か知らない。

○子どもが怖いというが、何が怖いのか理解できない。

今は何ともできない。経験値がついてくれば変わる。どこまで解決してあげられるかは学校による。特別支援の体制は将来的には変わる。本人は経験値を上げていくことで対処していく。

○中2生。周囲と判断基準が違う。

頭がよくて判断の基準が違う。思うのは自由だが「命の重さ」は伝わり難い。「すべてに敬意を」と伝える。社会のルールは7割の人には黙っていても理解するがこの場合は教えないとダメ。社会正義として許されない。

○中3生。進路先を悩む。中学の時に無理やり連れていかれたことがトラウマ。高校には夢がある。言葉を気にする。マイナスととらえる癖。

根拠のない自信。高校に行ってみないとわからない。学校になじめない子どもほどおどおどする。予測の中で織り込むようにする。うまくいなくても、「またダメ」を「頑張ったやん」と確認していくこと。両親の役割分担。細かくする方と距離をとる方など。

○学校のことは無理に触れなくてもいいのか。

本人の意思を尊重して無理に連れ出すのとは違う。まったく切れてしまうのは所属感がないと本人も寂しい。

